



【ごあいさつ】

BiPHかわらばん第2号をおとどけします。今年のはじめに年2回の発行を目指して創刊し、何とか半年後に第2号を出すことができました。NGOのニューズレターと言え、まずはご支援いただいている方々への活動報告という使命があるのですが、この「かわらばん」は、勉強会「寺子屋」参加者のみなさんや活動で関わりのできたみなさんの情報紙、そして、楽しい読みものになることをめざして、少しずつクオリティーとボリュームをアップしていきたいと思っています。

第2号では、今期の勉強会で最も多くの参加者があった5月の「コミュニティ開発隊員が見た東ティモールの健康」を取り上げました(2ページ)。加えて、1月、3月の勉強会も報告をしています(3ページ)。今後の勉強会など、事務局からのお知らせは4ページにまとめてあります。

この半年の事務局の動きとしては、1月に事務所を引っ越し、設立当時の瑞穂区に戻りました。電話番号が変わっておりますので、ご注意ください。また、以前からの目標であった地域保健プロジェクト立ち上げに向けての準備を開始しました。みなさまにご報告するにはもう少し時間がかかるとは思いますが、引き続き、応援をお願いいたします。(樋口)

【コミュニティ開発隊員がみた東ティモールの健康】



青年海外協力隊員(JOCV)として2018年2月まで県保健局で活動した長壁総一郎さんを勉強会にお招きし、コミュニティ開発隊員としてのご自身の活動と、東ティモールのプライマリ・ヘルス・ケアの現状と課題を中心に、東ティモールの「いま」を伝えていただきました。

→P2へ

【勉強会報告】

今年度の勉強会では上記のほか、12月に東ティモールスタディツアー報告会、1月に研究者倫理、3月に障害の社会モデルをテーマに取り上げました。これらのうち1月と3月の勉強会の様子はこちらから・・・。

→P3へ



【コミュニティ開発隊員がみた東ティモールの健康】

長壁総一郎さんは、国際協力機構(JICA)の青年海外協力隊員(JOCV)の平成27年度2次隊(10月派遣)として東ティモールに派遣され、ディリ県¹⁾保健局ヘルスプロモーション課に配属されました。要請²⁾された活動内容は、「健康増進プログラムをモニタリングし、住民参加率の改善や、医療従事者及びヘルスポランテアの能力強化・活動促進となるプログラムを同僚と企画する」というもの。当初の2年間の派遣期間を半年間延長して2018年3月に帰国したばかりのフレッシュな体験をシェアしていただきました。

県保健局とは、東ティモールにある13県のそれぞれで、保健・医療を統括している役所です。ディリ県保健局の管轄下には、健診や外来診療を行なっている保健センターが6つと、その支所であるヘルスポストが22ヶ所に置かれています。さらに保健活動をより住民に身近なものとするために、保健センターやヘルスポストの職員がコミュニティーに出向いて活動を行う通称「SISCa」(現地のことばで「包括的コミュニティー保健制度」の略称)があり、長壁さんの任務はSISCaへの住民参加率を上げて、またその活動の質を改善するというものでした。

そのために行った活動の中から、1. 乳幼児健診率の改善支援、2. 住民が保健情報にアクセスできる媒体作成、3. 組織間の連携促進、4. 地域の患者データの可視化支援、の4点が紹介されました。SISCaでの健診率をアップするために、モニタリング結果から原因を特定し、医療従事者やヘルスポランテアと改善に取り組んだとのこと。コミュニティーラジオを使った広報では、関係部局への根回しやラジオ局との契約のための段取りにも陰ながら尽力されたようです。県保健局が開催したあるワークショップの参加者から「栄養改善のためにデモクッキングをしたい」という要望が出た時は、NGOや母親グループを巻き込む活動の仕掛け人にもなったとのこと。「同僚や周囲の医療従事者が、徐々に自分のアイデアを行動に移していく様子や、つながりが少しずつカタチになりひとりでの動いていく様子に、活動を通してのやりがいを感じた。」と、お話をまとめてくれました。

協力隊員の活動は現地からの要請にもとづくとは言え、かなりの部分がそれぞれの隊員に任されているようです。長壁さんの活動は「コミュニティ開発隊員」ならではの内容で、「地域の健康は医療職だけが担うえるものではない、ということを具体的に示していました。

＊ ＊ OV³⁾から見た協力隊 ＊ ＊

BiPH事務局 石本馨(JOCVマレーシアOV)

私は作業療法士として臨床経験を積んだのち、1995年に青年海外協力隊に参加しました。帰国後は研究・教育の道に進み、またNGOワーカーとしてバングラデシュで活動、現在に至ります。協力隊経験が私を成長させたと言ってもいいでしょう。そんな私の経験をふりかえり、医療従事者にとっての協力隊参加のメリットを考えてみました。

1. 観察眼が向上する: 現地では日本の病院とは違う患者さんの様子、聞けないホンネ、環境や人間関係が人に与える影響、などが見えてきます。自分が気づかぬうちに、患者さんの生活を理解する視点が養われます。

2. 様々な職種の人とのつながり: 協力隊では派遣前訓練から様々な職種の人と交流があります。医療従事者は学生時代から勤務中に至るまで、周囲は医療職だらけのことが多いですよ。そんな状況が続くと、いわゆる「専門バカ」の状態になりかねません。医療職以外の人との交流が、自分の視野を広げ、それが帰国後の臨床現場や更なる活動にも役立ちます。

自分の持っている知識、技術、経験を生かせると同時に、臨床家としても人間としても、自分を育ててくれるのがJOCV。さあ、気軽にHere we go!

- 1) 東ティモールの首都のある県。人口約28万人。
- 2) JICAの国際協力は相手国からの要請に基づいて行われる。
- 3) old volunteer(元協力隊員)の略称。

【勉強会報告】

1/25(金)は、東邦大学(当時)の近藤麻理さんによる「看護・医療職者の倫理を国際研究とデュアルユース(軍民両用)から再考する」でした。

いまや国を超えての共同研究は当たり前ですが、デュアルユース(軍民両用)に鈍感なままでいると、知らない間に自分の研究内容や技術が国外流出したり、軍事転用されることにもつながりかねません。例えば、サイバーダイナ代表取締役社長の山海嘉之氏(筑波大学教授)は、リハビリや福祉目的のロボットスーツHALの開発において、サイバニクス¹⁾の技術が軍事利用に転用されやすいことから、株式上場の際に平和利用に限定することと明記し、安易に企業合併・買収ができないようにリスクに備えている、とのこと。近藤さんは、「今こそ研究者の倫理が問われている。」と強調していました。

池内了氏(名古屋大名誉教授)は、「科学者は結果責任まで考える必要がある。それがどう使われるかまで想像し、こういう使い方をしてほしくないと言明することは、科学者の社会的責任です。」と述べていることが紹介されました。今や研究者は、自分の研究の目的と結果の社会的責任の両方に向き合う時期にきています。研究成果が自分の意図せぬ利用をされないように、防衛策を講じることがすべての研究者に必要ですね。

- 1) 人間の身体機能を支援・拡張する、技術・産業・社会の創出を目指す学際的な学問分野。



3/23(金)のテーマは「バリアフリーのバリアってなに? ~障害について考える~」。バリアとは何か?どこにあるのか?を障害の社会モデルを使って考える時間となりました。また、BiPH事務局の石本が日本・マレーシア・バングラデシュの障害者の生活と、バリア解消に向けた活動を紹介しました。

世界の人口の15%が何らかの障害を持ち、そのうちの半数は貧困ライン以下で生活していると言われていています。もちろん日本も例外ではありません。ディスカッションでは、「すべての障害者が安心安全に暮らせるためには、貧困削減の視点で取り組むことも必要では?」との意見も出ました。

研究者倫理、研究の軍事転用、障害、どのテーマも最近メディアで取り上げられるものばかりですね。勉強会後にニュースや新聞を読むと、今までとは違った見方ができそうです。BiPHの勉強会では、これからも身近なものからグローバルなものまで、さまざまなテーマを取り上げます。ぜひご参加を!!!

プロジェクト準備進行中

BiPHでは、「日常保健データ」をプライマリ・ヘルス・ケア(PHC)レベルで利用することをめざしたプロジェクトを準備中。「日常保健データ」とは、PHC施設の業務で日々得られる健診、診断、予防介入、治療、転帰などのデータで、県、国へと集約されます。

2015年の国連総会で採択された「持続可能な開発目標(SDGs)」は「誰一人取り残さない」ことを理念とし、保健関連分野では、「すべての人が必要な保健サービスを受けることができる状態」であるユニバーサル・ヘルス・カバレッジ(UHC)がSDGsに盛り込まれました。日常保健データは、取り残された人はいないかどうかを知る鍵となります。PHCレベルではデータを集めて報告することに力が注がれがちですが、住民から得られた貴重な情報を、草の根でも住民にフィードバックして行くことができるようなしくみづくり、ひとづくりをめざしています。

【今後の勉強会】

詳細は随時HPやFBページでご確認ください。

回	日時	タイトル	担当	会場
55	7月27日(金) 18:30~20:00	日本国内における国際協力NGO ～地域におけるNGOの関わり～	林かぐみ (公財)アジア保健研修所 事務局長	昭和生涯学習 センター
特別 企画	9月7日(金) 18:00~20:00	グローバルにwell-beingを語るまい！ ～理念と情熱と愛想の国際協力からの 離陸～	国際リハビリテーション研 究会	名古屋市立 大学看護学部 402教室
56	9月28日(金) 18:30~20:00	科研費研究から草の根事業へ、そして 再び研究への展開 ～研究と現場をつ なぐミクロネシアの肥満対策～	水元芳 中村学園大学栄養科学部 教授	昭和生涯学習 センター
57	11月16日(金) (総会終了後) 18:30~20:00	難民緊急救援活動を行うスタッフの 日常を振り返る ～2000年のコンボ～	近藤麻理 関西医科大学看護学部 教授	昭和生涯学習 センター
58	1月25日(金) 18:30~20:00 (予定)	国際NGOでの障害者支援の実際 ～バングラデシュの経験から～	山内章子 (公社)日本キリスト教海外 医療協力会 理学療法士	昭和生涯学習 センター

昭和生涯学習センター 〒466-0023 名古屋市昭和区石仏町1-48

(アクセス:地下鉄鶴舞線及び桜通線「御器所」駅2番出口南約300m または3番出口南東約300m)

名古屋市立大学看護学部 〒467-8601 名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄1

(アクセス:地下鉄桜通線「桜山」駅3番出口すぐ または名古屋市バス「市立大学病院」下車すぐ)

【「健康をささえる社会のしくみを考えよう」報告集をお分けします】

会員の皆様にお配りした、連続公開講義「健康をささえる社会のしくみを考えよう」の報告集の在庫がまだ少しあります。ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ(UHC)の推進にリーダーシップを発揮しているタイ保健省国際保健政策計画(研究所)IHPPから、Viroj Tangcharoensathien氏と若手研究者2名を招いて、2016年12月に開催した講座&セミナーの資料です。貴重なお話をひとつにまとめた冊子を実費でお譲りしています。ご希望の方はBiPH事務局まで。

【会員募集】

当会は活動にご賛同いただける会員の皆様方からの会費で成り立っています。ぜひ会員としてご支援ください。会員の種別、払込先は以下の通りです。詳細はホームページ等をご覧ください。

個人正会員3,000円/年、個人賛助会員3,000円/年、法人会員30,000円/年

振込先:ゆうちょ銀行 00870-9-126227 シャ)ブリッジズインパブリックヘルス

【事務局だより】

こんにちは、事務局の石本です。BiPHに入ってもうすぐ1年。現在はニュースレターの編集はじめ事務局業務全般を担当しています。第2号はお楽しみいただけただけでしょうか?これからも随時お手元に届けられるよう頑張りますので、ご支援の程よろしくお願ひします。

会報「BiPHかわらばん」2018年7月号(通算2号)

発行:一般社団法人Bridges in Public Health

代表理事:樋口倫代

〒467-0027 名古屋市瑞穂区田辺通1丁目22番地2

TEL: 052-846-5878 E-mail: biph-adm@umin.ac.jp

URL: <http://plaza.umin.ac.jp/biph>

FB page: <https://www.facebook.com/biph.adm/>

